

『うひ山ふみ』を読む

—本居宣長著『うひ山ふみ』語彙用語索引—

高 松 正 毅

はじめに

「うひ山ふみ」という書名から、宣長が物まなびを山のほりにたとえたことがわかる。いや高き学問の山に入り立たむとする者たちへ、その山すそのほんの道しるべだけでも（もちろんここには謙遜の意味が込められているが）、という意図のもとに執筆されたのが、この『うひ山ふみ』である。

この著『うひ山ふみ』は、「初学びのともがら」に「物まなびの学びやうの法」を示した学問の手引書であると言われている。しかしこの著は、決して「云々（シカ）」してよろしと、さして教へ」たる書ではない。

（以下、引用にあたっては原本の点を現行の句読法に改めた。）
はじめに「世に物まなびのすぢ、しな／＼有て、一トやうならず。」「おの／＼好むすぢによりてまなぶに、…その学びやうの法も、…さま／＼あり。」と述べ、さらに「ゆくさきよこさまな

るあしき方に落ちざるやう、又其業のはやく成るべきやう、すべて功多かるべきやうを、はじめよりよくした／＼めて、入らまはしきわざ也。」と述べた上で、しかしながら、その「学びやうは、いかやうにてもよかるべく、さのみかゝはるまじきこと也。」
「大抵みづから思ひよれる方にまかすべき也。」「たゞ其人の心まかせにしてよき也。」と結論づける。そして、「詮ずるところ学問は、たゞ年月長く倦ずおこたらずして、はげみつとむるぞ肝要にて、…つとめだにすれば、出来るものと心得べし。」と、努力すること以外に方法はないのだと断言するのである。またそのように努力するために、「すべて学問は、はじめよりその心ざしを、高く大きに立てて、その奥を究めつくさずはやまじと、かたく思ひまうくべし。此志よわくては、学問すゝみがたく、倦怠るもの也。」「其中に主としてよるところを定めて、かならずその奥をきはめつくさんと、はじめより志シを高く大にたてて、つとめ学ぶべき也。」と、高大なる志を立てるべきことの重要性を説

く。

さらに宣長は、「さてその主としてよるべきすぢは、何れぞといへば、道の学問なり。」「此道は、古事記書紀の二典に記されたる、神代上代の、もろくの事跡のうへに備はりたり。」と述べて、「いにしへ学び」こそが学問中の学問であるとする。したがって、「此ノ二典の上代の巻々を、くりかへし」よくよみ見るべし。」ということが重要になるのであるが、「二典の本文を見たるばかりにては、道の趣、たやすく會得しがたかるべし。」であろうから、まずは『神代正語』をはじめとする自著の数々を読むことを勧める。

そのほか、二典のうち古事記と日本書紀とは古事記を先とすべきこと、万葉集は甚だ緊要の書であつて、学ばないではいられない書であること、記紀ばかりでなく、それ以降の事柄にも通曉しなければならぬから、「六国史」『延喜式』等（以下書名一覽を参照のこと）を読むべきこと等々、見るべき書物とその扱い方について詳しく述べ、前半部廿四丁ウラ7行目くらいまでは、さながらブックガイドの觀を呈する。これを見れば、宣長の学問が今日の「国語学」よりもはるかに広いものであることがわかる。今日の国語学者で、ここに宣長が示した書目を、すべて読破してゐる者がはたして何人いるであらうか。

さて、それ以降四十一丁ウラ7行目までは、そのほとんどを「歌の学び」について割いており、やや退屈である。しかしながらこの書は、小冊であるにもかかわらず、読むほどに味わいの深

い、いふし銀の趣のある妙著である。以下にいささか抜き書きしてみよう。

そもく人としては、いかなる者も、人の道をしらでは有べからず。
(四十二ウ)

まづ人として、人の道はいかなるものぞといふことを、しらで有べきにあらず。学問の志なきものは、論のかぎりにあらず。
(十オ)

すべて人は、雅の趣をしらでは有ルべからず。これをしらざるは、物のあはれをしらず、心なき人なり。

(四十一ウ・四十二オ)

すべて萬ツの事、他のうへにて思ふと、みづからの事にて思ふとは、浅深の異なるものにて、他のうへの事は、いかほど深く思ふやうにても、みづからの事はどふかくはしまぬ物なり。
(廿四ウ)

萬の事、本をまづよくして後に、末に及ぶべきは、勿論のことなれども、又末よりさかのぼりて、本にいたるがよき事もある物にて、
(卅四オ)

心のかしこき人は、いふ言のさまも、なす事のさまも、それに應じてかしこく、心のつたなき人は、いふ言のさまも、なすわざのさまも、それに應じてつたなきもの也。

(廿三オ・ウ)

学者はたゞ、道を尋ねて明らめしるをこそ、つとめとすべけれ、私に道を行ふべきものにはあらず。
(十三オ)

書をよむに、たゞ何となくてよむときは、いかほど委く見んと思ひても、限リあるものなるに、…物の注釋のみにもかぎらず、何にもせよ、著述をこころがくべき也。

(廿二ウ・廿三オ)

学問の手引きとして、あるいはこれは宣長の創始ではないのかもしれないが、この書の記述の形式も非常にすぐれたものである。七丁オモテまでに総論をひととおり述べ、それをさらに以下で詳しく説明するというやり方である。その説明に際しては記号(『相じるし』)が対応するようにしてある。以下に目次の代わりとしてあげてみよう。

① 世に物まなびのすぢしな／＼有て云々

一オ 2 ・ 七オ 10

② かのしな／＼ある学びのすぢ／＼云々

三ウ 3 ・ 八オ 6

③ 志シを高く大きにたて、云々

三ウ 8 ・ 十オ 5

④ 主としてよるべきすぢは云々

三ウ 10 ・ 十オ 8

⑤ 此道は、古事記書紀の二典に記されたる云々

四オ 3 ・ 十ウ 8

⑥ 初学のともがらは宣長が著したる云々

四オ 3 ・ 十三ウ 4

① 第一に漢意備意を云々

四ウ 1 ・ 十四ウ 6

② 道をしらんためには、殊に古事記をさきとすべし。

四ウ 3 ・ 十五ウ 2

③ 書紀をよむには大に心得あり云々

四ウ 4 ・ 十七オ 9

④ 六國史といふ云々

五オ 2 ・ 十八オ 2

⑤ 御世々々の宣命には云々

五オ 3 ・ 十八ウ 2

⑥ 釋日本紀、

五オ 5 ・ 十八ウ 9

⑦ 古事記傳云々

五オ 5 ・ 十九ウ 4

⑧ 古学の輩、

五オ 6 ・ 十九ウ 10

⑨ 初心のほどは、かたはしより文義を云々

五ウ 2 ・ 二十ウ 1

⑩ 其末の事は、一々さとし教るに及ばず。

五ウ 8 ・ 二十ウ 8

⑪ ひろくも見るべく又云々

五ウ 10 ・ 廿一オ 1

⑫ 五十音のとりさばき云々

㉔ 語釋は緊要にあらず。

六オ1・廿一オ7

㉕ からぶみをもまじへよむべし。

六オ2・廿一ウ1

㉖ 古書の注釋を作らんと云々

六オ2・廿二オ4

㉗ 萬葉集をよくまなぶべし。

六オ10・廿二ウ5

㉘ みづからも古風の歌をまなびてよむべし。

六ウ2・廿三オ2

㉙ 萬葉の歌の中にても云々

六ウ2・廿四ウ8

㉚ 長歌をもよむべし。

六ウ5・廿七オ10

㉛ 又後世風をもすてずして云々

六ウ6・廿八ウ5

㉜ 後世風の中にもさまざまよきあしきふりくあるを云々

六ウ8・廿九オ6

㉝ 物語ぶみどもをもつねに見るべし。

六ウ9・卅五オ8

㉞ いにしへの風雅のおもむきをしるは云々

七オ1・四十一ウ8

七オ2・四十一ウ10

今回、自らの興味の赴くにまかせて『うひ山ふみ』中の宣長の語彙を集めた。用語・術語と思われるものばかりではなく、学問の手引書ということも考え合わせて、広く評価に関する語彙は拾っている。

一 語彙用語索引

『うひ山ふみ』の索引を作成したのは、宣長の学問・研究に迫るために、まず用語・術語を整理したいという理由からである。

『うひ山ふみ』は学問の手引書であって研究書ではないが、これを手始めに次々と作成・整理していきたい。

またこれと付随的な問題でもあるが、語彙の読みを確定したいという欲求もある。書かれたものの全てが声に出して読まれることを、必ずしも宣長自身は想定していなかったろうが、どう読むべきか迷うものが多々あることも事実なのである。たとえば、「コジキデン」と呼びならわされている『古事記伝』も、宣長自身は「ふることふみのつたへ」と読ませたかったのであろう。このことは、とにかく訓で読めばよいのだといった、単なる「音」と「訓」の問題にはとどまらない。この『うひ山ふみ』でも、たとえば「輩」は、ひらがなでも表記してあるところから、「やから」ではなくて「ともがら」と読むべきことが明らかである。また極力訓で読むことにしたとしても、全ての語を訓で読むわけにはいかないのであって、「漢意」はふりがながあるとおり「カラゴコロ」と読むことは良いのだが、「儒心」は「ジュゴコロ」？

と重箱読みに読むしかないであろう。さらには、用字の問題もあって、宣長にはある程度書き分けを行なっている場合がある。たとえば、「ふみ」が、和文漢文にかぎらず文章を意味する場合には「文」で書き、書籍を意味する場合には「書」または「籍」で書き（「籍」の単独での用例は『うひ山ふみ』にはない。「漢籍」（カラブミ）のような例のみである。また古事記・日本書紀を意味する場合には「二典」「御典」のように「典」を用いている。）、歴史書を意味する場合には「史」で書いている。

以上の如きことに關しては、賀茂真淵の『にひまなび』との関連を真つ先に考えなければならぬのであるが、内容の比較を含めこれには別稿を用意したい。

二 書名一覧

先に述べたとおり、この『うひ山ふみ』の前半部はブックガイドとも言うべき手引きとなっており、このように索引形式で示すことによって読むべき本を一覧することができる。宣長の示したものが、今目的に見ても決して価値を失っていないことがわかるであろう。

三 人名・神名一覧

四 時代語一覧

日本語の時代区分といえ、まず真つ先に念頭に浮かぶのは、

富士谷成章の「六運」であろう。では、ひるがえって本居宣長の時代区分の観念はどのようなものであったかを明らかにしたい、その基礎準備作業として抜き出してみた。『うひ山ふみ』中にも「近世風の歌よみのかなづかひは、中昔よりのことにて、古書にあはず。」（廿一才）とあり、この「中昔」が厳密には一体いつごろを指すのか、今後の研究で吟味していきたい。また宣長は、「歌」について「ふり」あるいは「さま」などといった語で、時代について言及しており（例、「千載集より、廿一代のをはり新續古今集までのあひだ、格別にかはれることなく、おしわたして大抵同じふりなる物にて、中古以来世間普通の歌のさまこれなり。」卅七才・ウ）、時代区分についての深い認識があったことは確実である。その結果が成章の時代認識と一致するかしないかについても合わせて別稿を用意したい。

五 あてよみ字訓一覧

この『うひ山ふみ』にはとところどころに「ふりがな」が施してあるが、ことばが先にあってそれに漢字をあてる「宛て字」というよりも、漢字表記があらかじめあってそれに読みを与える「あてよみ」とでも言うべきものが散見される。漢字で視覚的に意味を伝え、読みはあくまで訓で行なうといったものである。これらは宣長独自のものもあろうし、また当時ごく一般的に用いられていたものも混じっているようだが、今回はその区別なく、目についたものを集めてみた。訓として、ごく普通のものでも、二種以上あつ

たものは加えておいた。

以上のものを、以下に索引形式で示す。今回索引作成にあたり、底本として用いたのは和泉書院影印叢刊⑨の影印版（これを「底本」と呼ぶ）である。出現箇所はページではなく、漢数字が丁数を、「オ」が表、「ウ」が裏、算用数字は行数を表す。当該語が二行にわたる場合は、語頭の現われる方を行数として与えてある。私の知り得たかぎりでは『うひ山ふみ』の影印は二点が公刊されている。一点は、今回底本として用いた和泉書院版、もう一点は古く昭和四十二年に、龍谷大学国文学会出版部が上梓したものである。

底本では濁点は概ねついており、ついていたりいなかったりするものは単なる落ちだと思われる。その中でも、「ひがこと」と「やまとたましひ」（ちなみに「やまと」を「大和」と表記した例は『うひ山ふみ』にはない。）には一貫して濁点がないから、宣長自身がこう読ませたかったのであろう。書名を「うひ山ふみ」とするのは四十三ウにある和歌によるかと思われる。内題には濁点はない。気になるのは「いみじ」「云々（シカム）」で、一例も濁点のついたものがない。どうして「いみじ」「シカム」のようにしなかったのか不審である。

今回索引制作にあたり、筑摩書房刊、昭和四十三年五月刊の本居宣長全集第一巻（これを「全集本」と呼ぶ）を参照した。そこで考えさせられることがあったので最後に記しておく。全集本で

の底本は、末尾に「須受能屋藏版」ではなく「須受能耶藏版」とあるところから、和泉書院版の解説の（四）刊行年不詳本第二類にあたるかと思われる。

まず、この全集本では底本に施されている点をすべて読点「・」で表している。底本では「・」に近く、黒ゴマ点ではない。もとより区切りを示す点は、一種類しか用いられておらず、句点と読点の区別はないから、なにで示そうが同じであるが、多少気にはなるところだ。その「点」に関して底本にあるものを落としてしまったと思われる箇所を一箇所見つけた。

上にいへることくにて、おほくはただ 四十二オ5・6

ところが逆に和泉書院版の影印では、私が見つけ得たかぎりでも次の五ヶ所の点または送り仮名が、消えていて見えない。

四オ2「ゆきわたりたるまことの道」の「・」

五オ5「出雲国ノ風土記」の「ノ」

十二オ1「教へ」の「へ」

十四オ3「縣居ノ大人」の「ノ」

卅九ウ8「古への集共」の「へ」

これらは架蔵本でははっきりと見えており、ここでは全集本の翻刻の方が正しい。さらに、廿五ウ9「吾師ノ大人」の「ノ」が、影印では欠けていて、わずかに跡だけが残るが、架蔵本でははっきりと見えている。架蔵本は、和泉書院版の解説では（二）刊行年不詳本第一類（寛政十一年春刊本から刊年の記載のみを削除したもの）にあたる。刊行された『うひ山ふみ』がすべて同一版か

ら出たものと仮定すると、常識的に考えれば和泉書院版が、私の架蔵本よりも（さらには全集本の底本よりも）先行することになるのだが、影印のシャープさからいっても、刷り具合からいっても刊行年不詳本の方が古いように思われる。ところが、刊記と弘所のある奥付けは明らかに影印の方がシャープである。影印はあたかも本体と奥付けが別物であるかのごとくなのである。再調査を期したい。

全集の翻刻で問題だと思われたことの第一点は「ほうし」（二十オ2、卅八オ3、四十一オ4）を「ほふし」と翻字していることである。正確な字音かなづかいから言えば、全集の方が正しく、影印の方が間違っている。つまり宣長本人が間違っているのである。それをあろうことか勝手に直してしまっているのである。

（あるいはやはり別版があるか。）

もう一点は翻字の際の漢字字体の統一である。全集本では漢字を旧字体に統一してしまっている。しかし宣長自身は必ずしもそのようには書いていないのである。たとえば、『うひ山ふみ』では「學」の字は一例も用いられていない。また「体」の字は一例も用いられていないが、「躰」が5例、「體」が2例である。

翻刻の際、変体仮字は全て現行の仮字字体で統一するのであるから、統一してしまうのが問題だと言うのではない。統一するなら現行字体で充分だと考えるのである。でなければ特別な異体字を除いては、漢字に関する限り忠実な翻字にすべきであらう。勝手に統一してしまうのではなく、そのようにして当時の漢字字体

の使用の実態をも示そうと努めるのが真の学問的態度ではないだろうか。

一 語彙用語索引

あ

「相じるし」七オ6

「論ひ」七オ7→ろんじ

「あし」〔形〕一ウ9、二ウ2、十三オ5、十四オ4、十四ウ3・5、

廿六ウ8・9、廿七ウ1、廿九オ7・8、廿九ウ4・5・7、卅一

ウ1、卅三ウ2・2、卅五オ9・10、卅六ウ8、卅八オ7、卅八ウ

5、卅九オ10・10、四十オ4・7・8・9、四十ウ3、四十一ウ3

「あしき歌」廿六オ9、廿七ウ1、卅三オ6

「あしき風」廿九ウ4、卅七オ8

「あしきふり」六ウ10、卅五オ8

「あだ事」四十二オ7、四十三オ2

「あはれ」廿六ウ9、三十ウ4、四十二オ1

「天の石屋」廿六ウ10

「あや」十六ウ6、廿六オ6・9、三十オ7、三十ウ3・6

「あやしき詞」廿七ウ3

い

「意」↓こころ

「勢」廿七オ4・8、三十ウ8「いきほひ」卅一ウ3

「いにしへ」↓時代語一覽

「古へさまの事」九ウ2

「古意」廿三オ7・7、廿四オ9、卅五オ6

「いにしへ人」七オ2、四十一ウ10「古へ人」卅一オ9、四十二オ3

「古人」廿一ウ7、卅三オ1・3、卅四ウ2、四十オ5、四十二オ8↓時代語一覽いにしへのひと

「古風」六ウ7・8、廿七ウ2・8、廿八オ9、廿八ウ5、卅一オ7、

卅一ウ5・7、卅二オ5、卅二ウ1、卅三オ8、卅三ウ6・8・9、

卅四オ2・4・8・10、卅四ウ1・3・10

「古風と後世と」廿九ウ7、卅四ウ5

「古風と後世風と」卅五ウ4

「古風の歌」六ウ2、廿三オ5、廿四ウ8、廿五オ4、廿七オ8、

卅五ウ6

「古風の長歌」廿九オ4・5

「古へぶりの文」廿三オ6「古ぶりの文」廿五オ4

「いにしへ学ビ」十六オ6「此まなび」二十オ3↓こがく

「衣服」四十二ウ3

「意味」二十ウ6、廿五オ3

「いろは假字」十六ウ3・4、十七オ6・8

う

「歌」一オ9、六ウ2・3・4・5・7、七オ1、十六ウ6、二十ウ9、

廿三オ5・5、廿三ウ9・10、廿四オ9、廿四ウ1・8、廿五オ1・

4・9・9・9、廿五ウ4・7、廿六オ1・2・4・5・8・9・

9、廿六ウ4・5・5・5・6・7・8・9、廿七オ2・3・5・

7・8・10、廿七ウ1・3・5・7・8、廿八オ3、廿八ウ3・9、

廿九オ3・7・10、廿九ウ2・3・4・5・6・6、三十オ1・1・

2・6・10・10、三十ウ1・3・8、卅一オ5・9、卅一ウ1・6・

10、卅二オ2、卅二ウ3・5・5・8・9、卅三オ4・6・6、卅

三ウ6、卅四オ7、卅四ウ3・4、卅五オ10、卅五ウ2・3・4・

5・5・7・8・10、卅六オ1・3・3・7、卅六ウ1・5、卅七

オ1・8、卅八オ5・6・7、卅八ウ2・4・4・5・6・10、卅

九ウ7・9、四十オ6・7・8・9、四十ウ1・2・3・6・7・

9、四十一オ5・8・8・10、四十一ウ2・2・4、四十二オ2・

6、四十二ウ1、四十三オ1

「歌のおもむき」廿四ウ5

「歌の詞」廿五オ10

「歌の定まり」廿六オ10

「歌のさま」卅七オ5、卅七ウ2、四十オ3↓うたさま

「歌の集」四ウ7、廿三オ2↓かしゅう

「歌の本意」三十オ4、三十ウ5「歌といふもの、本意」卅九オ6

「歌さま」卅二ウ6↓うたのさま

「歌文」廿二オ2、卅四ウ5、卅五オ4

「歌書」二十オ2・4、四十ウ8、四十一オ5

「歌まなび」七オ3、九ウ4「歌の学ビ」一オ9↓かがく

「歌よみ」廿一オ10、廿六オ2

「歌よむ人」卅二ウ7

え

「益」廿一ウ6、廿二オ5、廿二ウ10、廿三オ3、卅五オ1、四十ウ1

お

「大御世」廿九オ2↓みよ

「掟」十三オ5、卅七ウ4、卅八ウ8・8、四十オ1・4
「行ひ」〔名・動〕十二オ9・10、十二ウ1・8・10・10、十三オ3・6・10、十三ウ2

「おしえ」↓をしへ

「男もじ」十七オ6

「男ぶみ」十七オ6

「男ぶり」廿九ウ5

「音の豎横の通用の事」廿一オ7

「おのづからの勢ヒ」廿七オ4・8、三十ウ8

「思ひとれる」十三オ6「思ひとれるかた」一ウ5「おもひとれるすぢ」十四ウ3「思ひとれるところ」三オ9、卅三ウ7

「思ひよれる方」二オ4「思ひよれるすぢ」一ウ3・5、二オ6

「思ふ心」廿三ウ3、廿六オ5、三十ウ5、卅一オ1「おもふ心」廿三ウ4、三十ウ3「思ふこゝろ」三十オ1「思へる心」廿三ウ7、廿四オ1

「趣」十一オ2、十二オ2、十四オ2、卅一ウ8、卅二ウ3、卅九オ7、四十一ウ10、四十二オ2「おもむき」六ウ5、七オ2、廿四ウ5、卅三オ1、四十一ウ10

「於蘭陀」七ウ7

「女もじ」十七オ6

「女ぶみ」十七オ6

「女ぶり」廿九ウ6

「陰陽」十一オ10

か

「歌」↓うた

「雅」↓みやび

「害」十三ウ10、廿一オ5、卅五オ2

「外国」九ウ9、四十二オ10↓よそのくに

「歌学」四十ウ9、四十一オ6・7・8・10、四十一ウ2・3・4↓うたまなび・うたのまなび

「歌学者」四十ウ9

「歌集」一オ9、卅八オ8、四十二オ7↓うたのしゅう

「歌書」↓うたぶみ

「雅情」卅一オ3、四十二オ8

「歌人」廿六オ3、卅六ウ6、卅八オ10、卅九ウ2・3、四十ウ2・5

「歌仙」四十オ8

「かたかな」七オ5「片假字」十六ウ1・9

「假字」十六ウ7

「假字返シの法」廿一オ7

「かなづかひ」六オ1、廿一オ10「假字づかひ」廿一オ9

「假字文」十六オ8、十六ウ3、十七オ6

「要」四ウ2、十五オ5、廿一ウ8↓よう

「歌文」↓うたぶみ

「神」廿六ウ9・10、三十オ9、卅三オ4、卅八ウ8、四十二ウ7

「神の道」廿四ウ3

「神の御典」十五オ9↓しんでん

「漢国」十六オ9

「漢意」四オ10、四ウ1・5、十四オ3、十四ウ6・9、十五オ4・7、卅五オ5・6「からごゝろ」十五ウ1

「漢詞」十八ウ6

「漢さま」九ウ5「かの国さま」十二ウ3

「漢籍」六オ2、廿二オ4、廿二ウ4「から書」八ウ2・5、廿二オ7・10「からぶみ」六オ6、八ウ1、廿二オ4・6、四十一ウ5

「漢風」十二ウ3

「からめき」十一オ10・十八ウ7

「漢字」七ウ1・4・4・5、八オ2

「漢学者流」十二オ3

「漢字」六オ3

「官職」一オ4、八ウ4・6・10、九オ10

「漢籍」↓からぶみ

「漢文」六オ3、十五ウ10、十六オ8、十六ウ2・4・5、十七オ1・

3・3、十七ウ5・8、十八ウ3、廿四オ7・8「かの国ぶみ」六

オ5「かのふみ」六オ7

「漢文さま」十六オ7、十六ウ8、十七オ5

「肝要」二ウ5、六オ8、卅五オ7

「漢流」十二オ5、十七ウ9、四十二オ6

き

「紀事」廿五ウ7

「儀式」一オ4、八ウ4、九オ1・10

「偽書」十九オ10、十九ウ1

「紀傳」九ウ6

「御撰」十五ウ5

「行法」十二オ8・8

「記録」九ウ3、十七オ4

「議論」四十二オ6

「近世」↓時代語一覧

「近世風」卅九オ1

「近世風の歌よみ」廿一オ10、廿六オ2

「近世風の歌人」廿六オ3、四十ウ5

「近體」廿五ウ2

「緊要」六オ2、廿一ウ1、廿九ウ6

「緊要の書」四ウ7、廿一オ2・4

く

「くせ」卅六ウ7、卅九オ1「癖」卅八オ8、四十一オ3

「供佛施僧のわざ」十三オ7

「訓」廿四ウ6

け

「藝道」卅九ウ4

「差別」廿三ウ4、卅四ウ5、卅五オ1「けちめ」六ウ7、廿五オ10、

廿六オ9

こ

「古」↓いにしへ・ふるき↓時代語一覧

「皇朝」八オ8

「皇朝の学問」七オ10↓すめらみくにのまなび

「皇朝学」七ウ6

「皇朝詞」十八ウ3

「皇國・皇国」↓すめらみくに

「校正」十九オ6・7

「後世」↓時代語一覧

「後世家」廿八オ3

「後世風」六ウ7・8・9、廿九オ3・6、卅一オ4、卅一ウ4・6、

卅二オ8・9、卅二ウ2、卅三オ8、卅三ウ6・8・9・10、卅四

オ 2・4・7・9、卅四ウ6・8・9・9、卅五オ1・2・8・9、
卅五ウ5・9・9、卅六オ9

「後世風の意詞」卅二オ7

「後世意」卅五オ5・6「後世の意詞」卅四ウ4

「古歌」廿四オ2・4、廿五オ1↓ふるきうた

「古学」十四オ5、十九オ2、十九ウ6・10、卅三ウ5、卅五オ6「此
学問」二十オ2「此学」二十オ7、四十一オ4↓いにしへまなび

「古学の輩」五オ6、六ウ8、十九ウ10、廿一ウ10「古学のともが
ら」十六オ4、廿九ウ9

「古学のをしへ」二十オ10、廿三オ4

「五行」十一オ10

「國学」七ウ2・6

「国史」十八オ7・9

「古言」↓ふるきことば

「古語」↓ふるきことば

「意」四ウ5、五オ3、六ウ4、十一オ4・4・6・7、十一ウ1・8、
十二オ5・7、十三オ6、十三ウ7・9・9、十四ウ8、十七ウ10、
廿一ウ1・7・8・9、廿二オ1・1・2、廿四オ4、三十オ3、
卅一ウ1、卅二オ7、卅二ウ4、卅四ウ4、卅六オ7、四十二オ10

「誤字」十九オ6、廿四ウ6

「故実」一オ5

「語釋」六オ2、廿一ウ1・1

「五十音のとりさばき」六オ1、廿一オ7

「古書」↓ふるふみ

「古人」↓いにしへびと

「古體」廿五ウ2

「古典」十六オ3

「古傳説」十六オ6、廿四オ6

「語のふり」十六ウ1

「言」廿一ウ1・7・8・9・10、廿二オ2、廿二ウ1・3、廿三オ9、
廿三ウ1・2・3・4・5・6・8・9・9・10・10、廿六オ6、
三十オ7

「言の延つめ」廿一オ8

「詞」五オ3、十六ウ6・8、十八ウ7、廿二オ9、廿五オ9・10、廿
六オ6・8、廿七オ9、廿七ウ3・7・9、廿八オ1・2、三十オ
3、三十ウ6、卅二オ8、卅四ウ4、卅六オ7、卅六ウ9

「詞のあや」廿六オ9、三十ウ2↓あや

「詞のしらべ」廿六オ7

「詞のつかひやう」廿五ウ5

「詞のつゞけさま」卅八ウ10

「詞づかひ」廿五オ9、廿八オ1

「辞」廿七オ1

「異風」卅七オ9

「ことよき」六オ7、廿二オ8・8

「理」二オ10、廿九オ9「ことわり」十一ウ4、廿九ウ3、三十オ5

「古風」↓いにしへぶり

「古風家」廿九ウ10、卅三ウ3、卅四ウ9、卅六ウ4

「古風家の歌」廿八オ3、廿八ウ3

「古文」廿五オ5・8、廿五ウ1

「古本」十九オ6・6

「混雜」廿八オ3、卅四オ3、卅四ウ6・10、卅五オ3

「さ

「祭祀」十二オ10

「定まり」廿六オ10、廿八オ10「さだまり」廿八オ8

「差別」↓けちめ

「さま」四オ3、八ウ8、十ウ10、二十オ8、廿二オ10、廿三オ10、廿

三ウ1・1・2・2・3・4・5・6・6・10、廿四オ1、廿五ウ

3、三十オ6、卅一オ1・2・9、卅三オ2・3、卅五ウ6・9、

卅六オ1、卅七オ4・5、卅七ウ2、卅九オ1、四十オ3

「算道」九ウ7

「三部の本書」十五ウ3

し

「式」十二オ10、十二ウ1・2・4・6

「事実」廿九ウ1

「師匠」卅九ウ10

「時代」廿三ウ4・4、卅四ウ1、四十一オ1「此時代」卅六ウ6、卅

七オ1「其時代」卅七オ9

「実事」九ウ8

「実情」廿九ウ2、三十オ2、三十ウ1・8、卅一オ2・7・8

「四道」九ウ6

「四道の学」九ウ5

「品（文・歌の）」廿五ウ5、卅五ウ1「しな」廿五ウ5・6

「写本」十九オ6

「儒」十三ウ9

「集」四ウ7、廿三オ2、廿七オ10・10、卅三オ6、卅五ウ4・9、卅

六ウ4・5、卅七オ7・7・10、卅七ウ7、卅八オ1・9、卅九ウ

8、四十ウ8

「儒学」九ウ9

「儒意」四ウ1、十二オ6・9、十二ウ1、十四ウ6、十五オ2

「儒者」十一ウ2

「儒道」十一オ4・7、十ウ1・5・7

「儒佛」十ウ10、十一オ1、十二オ1、廿四ウ3

「書」↓ふみ

「序」廿五ウ6、三十ウ2（序詞）

「上手」卅六オ7、卅七オ1、四十一オ9

「装束」一オ5、九オ5・9

「消息」廿五ウ7

「消息文」十七オ4

「詔勅」十八ウ2↓みことのり

「勝劣」十オ2、卅二オ1、卅七ウ7

「諸家の記録」九ウ3、十七オ4

「諸藝」卅九ウ6

「序詞」三十ウ1

「書籍」十六オ9

「書法」十六ウ9

「下ノ句」卅二ウ5

「潤色」十七ウ5・8

「情」↓なさけ

「しらべ」廿六オ6・7・10

「しるし」七オ5・8

「記しざま」十六オ1「しるしざま」十七ウ1

「神学」一オ4

「神学家」十二オ3

「神学者」一オ4、十二ウ9、十七ウ7、卅九ウ2・3

「神学者流」十一オ7、十一ウ4

「神典」十一オ9、十三ウ4、十五ウ2

「神道」十一ウ2・3・7・10、十二オ1、十三オ4、四十二オ10

「神道の行ひ」十二オ10、十二ウ10

「神道家」十一ウ2、十二オ9

す

「末」卅四オ6・6、四十二ウ10

「末の事」五ウ8、十ウ3、二十ウ8

「すがた」六ウ6、廿七ウ7、卅二ウ3、卅六オ8、卅七ウ6、卅八ウ10

「皇國」四オ2、十二オ9、十六オ9「皇國」七ウ7、八オ3・10、十八ウ7

「皇國の事」七ウ10「皇國の事の学」七ウ2

「皇國の語」十六ウ10

「皇國の学」七ウ4

「皇國の道」十ウ6

「天皇」四オ1、十三オ1

せ

「制」六オ4、八オ8・8・10

「正史」五オ2、十七オ9

「正風（赫）」卅七ウ6、卅八オ5

「世間」十二ウ10、十七ウ7、廿六ウ4、卅七ウ2、卅八オ2、四十二オ4

「世俗」十二ウ1、十三オ8、廿二ウ2、卅一オ9

「説」十一オ5・6・7、十一ウ3、十三ウ8、十四オ8、十八ウ9、十九オ3・4、十九ウ10、廿三オ4、卅九オ10、卅九ウ1、四十二オ1・3

「撰集」卅六オ4

「先祖の祀り」十三オ7

「全赫」廿七ウ10・10、卅四ウ5

「宣命」五オ3、十六ウ8、十八ウ2・4・6、廿五オ6

そ

「宋学」十二オ3

「宋儒」卅九オ9

「宗匠」卅八ウ4、四十ウ4

「葬喪」十二オ10

「祖師」卅九オ10

た

「赫」↓てい

「題」三十オ2、卅一ウ1・3、卅八オ4・6

「大事」廿九ウ8

「だうり」卅三オ3、四十一オ9

「脱文」十九オ6

「他門の人（々）」卅七ウ3、卅八ウ6

ち

「注釋」六オ10・10、十三ウ4・6・9、廿二ウ5・7、廿三オ1

「長歌」六ウ6、廿八ウ5・5・7・10、廿九オ4・5

「朝鮮」七ウ7

「朝廷」八ウ8、九ウ1

「朝廷の正史」五オ2、十七オ9

「調度」一オ5、九オ5・9、四十二ウ4
「著述」廿三オ1

つ

「通用」廿一オ8
「作りこと」三十ウ9「作り事」卅一オ1・7・10
「つよき歌」廿九ウ6
「つねの言」廿六オ6「つねの詞」廿六オ8「つねの文書」十七オ4

て

「駄」廿八オ3
「手本」廿七ウ7、卅七ウ8、卅八オ1・4
「傳説」十六オ1↓こでんせつ
「天皇」↓すめらみこと
「傳來」卅八ウ2・2・3、卅九オ8、卅九ウ5・7・9

と

「道統」卅八ウ1、卅九オ8
「どうり」↓だうり
「とりさばき」六オ1、十一オ10、廿一オ7、四十一オ5

な

「情」卅四ウ2、卅六ウ6、四十二オ3

に

「廿一代」卅七オ10
「二條家の正風（駄）」卅七ウ6、卅八オ5

の

「後世」↓こうせい↓時代語一覽
「のり」廿五オ8、卅五ウ7「則」廿八オ6「法」一ウ2・9、三オ5、五ウ8、十六オ10
「祝詞」五オ9、十六ウ8、廿五オ6、廿七オ1

は

「博識」廿一オ1
「八卦」十一オ10
「法度」廿八オ3・4・5・7、廿八ウ2、卅四オ9、卅八ウ7・9、四十オ1
「板本」十九オ5

ひ

「ひがこと」八オ4、十一ウ5・5、十七オ4、廿二オ3、廿八オ7、四十一ウ1
「人の道」十オ9、四十二ウ5
「一トわたり」二オ9「一わたり」三オ10、廿六オ10、廿九オ8、廿九ウ1、三十オ5
「評論」四十オ10

「平假字」十六ウ2・10

ふ

「風」↓ふり

「風雅」↓みやび

「風流」四十二ウ2・4

「二典」四オ4・5・8・8、四ウ3・6、六ウ1、十ウ8・8、十オ2、十九ウ8、廿三オ2、廿四オ3・9、廿五オ6、廿六ウ4・

5

「佛家」十二オ8、十二ウ7、卅九オ8・9

「佛字」九ウ9

「佛書」四十一ウ5

「佛道」十一オ4・5・5・6、十一ウ4・9↓ほとけのみち

「書」一オ7、一ウ7、四オ9、四ウ7・9・10、五オ6・7・8・8・

10、五ウ2・4・5・6・7・10、八ウ8、九オ1・2・4・7・

9、九ウ1・9、十ウ10、十一オ1、十三ウ5、十四オ9・10、十

五ウ7、十六オ4・7・8、十八オ6・7・9・9、十八ウ1・8・

9、十九オ1・5、十九ウ3・7・7、廿一オ2・4、廿二オ2、

廿二ウ5・8、廿三オ2、廿五ウ2、廿八ウ3、卅八オ9、四十一

ウ6、四十二ウ4・6、四十三オ5

「文」四ウ4、十六オ7、十七ウ7、廿三オ5・6、廿五オ4・5・6・

7・9・9・10、廿五ウ2・4、廿七ウ5・8、卅四ウ4、四十二

ウ1

「史」五オ3、六オ5、十八ウ3・5、廿三ウ9・9

「ふり」十六ウ1、卅二オ10、卅六オ8、卅七ウ2「風」廿九ウ4・5、

卅二オ10、卅七オ8、卅七ウ7、卅八オ6「ふりく」六ウ10、卅

五オ8

「部類」十八オ6

「ふるき衣服調度」四十二ウ3

「ふるき歌」卅五ウ4・5↓こか

「ふるき歌集」一オ9

「古き語」十八ウ5「古語」四オ6、十八ウ5、廿一オ8、廿四オ6、

廿五オ6・7

「古言」廿三オ6・7、廿四オ2・4・7・9、廿四ウ1

「古意」↓いにしへのこころ

「ふるき意詞」五オ3

「ふるき詞づかひ」廿八オ1

「ふるき集」四十ウ8↓いにしへのしゅう

「古書」一オ7、六オ3・10、九オ8・8、十四ウ1、十六ウ4・7、

十七オ3、十八オ4、十八ウ10、十九オ9、十九ウ4・10、二十オ

5、廿一オ10、廿二ウ5、廿五オ7「古き書」四十二ウ4

「文意」廿一ウ9

「文義」五ウ3、二十ウ1・1

「文辞」廿二オ9

へ

「変化」卅四ウ3

ほ

「法」↓のり

「佛」十一ウ7、十三ウ9

「佛の道」十一ウ10、十二オ7↓ぶつどう

「本意」十ウ4、三十オ4、三十ウ6、卅九オ7

「本文」十四オ2

ま

「真假字」十六ウ7

「枕詞」三十ウ1・2

「まことの」四オ2、十ウ5、十二オ1「真の」十五ウ7

「真盛(マサカリ)」卅六ウ2・3

「末書」十三ウ5・6・9

「祀」十三オ7

「学びかた」二ウ6、廿五ウ2、四十ウ6

「学びやう」一ウ4、二オ9、二ウ5「まなびやう」一ウ5・7、

二オ2

「学びやうの法」一ウ1、三オ5、五ウ7「まなびやうの法」

一ウ9

「萬葉ぶり」廿五ウ7「萬葉風」廿八ウ1、廿九オ6、卅三オ5

「万葉風」廿八ウ9、卅二オ6、卅二ウ8

み

「御國」十ウ5

「詔」十八ウ3

「道」一オ3、四オ1・1・2・2・3・3・3・9・9、四ウ1・3・

7・8、七オ3、十オ8・10、十ウ2・2・4・5・6・8・8・

10、十一ウ10、十二オ1・4・7、十二ウ7、十三オ1・2・9・

10・10、十三ウ10・10、十四オ5、十五オ2・5・6、十五ウ2・

10、十六オ3、二十ウ10、廿三オ3・4・8、廿四オ3、廿四ウ3・

3、廿五ウ10、廿六オ4・7、三十オ8、卅五オ4、四十二オ4・

5・9・10、四十二ウ2・5・7・9、四十三オ4

「道の掟」四十オ4

「道の趣」十一オ2、十四オ2

「道の学問」三ウ10

「道の意」十一ウ8、十二オ7、十三オ6、十三ウ7、十四ウ8、

廿四オ4

「道のすぢ」十四オ8↓みちすぢ

「道の大意」十四オ9

「道すぢ」二十オ2↓みちのすぢ

「みづからの国」七ウ3、八オ3、十オ1↓わがくに・すめらみくに

「御典」十五オ10、十七ウ4・4

「雅」廿四ウ4、四十二オ3「みやび」四十二オ3

「風雅の情」卅六ウ6

「風雅のおもむき」六ウ5、七オ2、四十一ウ10「雅の趣」卅九オ

7、四十一ウ10「みやびの趣」四十二オ2

「御世」六オ4、八ウ8、十二ウ3

「御世々々」五オ3、八ウ9、十七オ10、十八オ8、十八ウ2・2、

廿五オ6

「御代」十六オ7

「御代御代」四ウ9「御代々々」十七ウ2

「明経」九ウ6

「明法」九ウ7

「明法道」九ウ7

「名目」十七オ8

む

「無益」四十一ウ6↓えぎ

「無理」 卅六ウ8、10

め

「目うつし」 十一オ1

「めでたき歌」 卅五ウ10

も

「文字」 十六オ9「もじ」 十六ウ6

「本」 二十オ1、卅四オ5・6、四十二ウ9

「本の意」 廿一ウ1・7、廿二オ1

「物語書」 一オ9、七オ1、四十二オ2「物語ぶみ」 四十一ウ8

「物がたりぶみ」 七オ2

「物しり人」 一ウ6、十一オ3

「物のあはれ」 四十二オ1

「物まなび」 一オ2、七オ10「物字ビ」 七オ10「物字び」 四十二オ4

「ものまなび」 四十三オ3

「もろこし」 七ウ7・9、八オ3・9、八ウ4

「もろこしの国の制」 八オ8「かの国の制」 六オ4

「文書」 十七オ4

や

「和歌」 卅九ウ10

「やまとたましひ」 四オ10、六オ6、十五オ7「やまと魂」 四ウ2、廿

二オ5「山跡魂」 八オ4「倭魂」 廿二オ7

ゆ

「有識の学」 一オ6

よ

「世」 一オ2、九オ2・6、十一ウ2、十二ウ4、十三オ7、十三ウ3、

十四オ10、十八ウ4、十九オ2・9、二十オ7、二十ウ3、廿四オ

2、廿五ウ9、廿七オ3、廿九ウ1、三十ウ6、卅五ウ1、卅七ウ

6、四十ウ9、四十二オ3↓時代語一覽

「世の学者」 八ウ7、十四オ3、十五ウ3

「よのつねの」 廿二ウ2・廿六オ6

「世の中」 八オ1、廿九オ2、卅七ウ3「世ノ中」 十四ウ10

「世のならはし」 卅九ウ4

「世の人」 廿二オ7、卅一オ1・6、卅四ウ1・2

「用」 十九オ2

「要用」 廿一オ9

「よし」 「形」 (副詞の「よく」は除く) 一ウ6、二ウ1・4・5・6、

三ウ1、四ウ1、八オ9、十七オ4、二十ウ3、廿一オ3、廿一ウ

4、廿六ウ3、廿八オ4、廿八ウ6、廿九オ9、卅一オ8、卅二オ

2、卅二ウ3、卅三オ4、卅三ウ1・2・4、卅四オ7・8、卅五

オ9、卅八オ1・4、卅八ウ3・6、卅九オ5、卅九ウ1・1・5、

四十一オ10

「よきあしき」 六ウ9、廿七ウ1、廿九オ7、卅五オ8、卅八ウ5、

卅九オ10

「よき歌」 廿六オ2・9、廿六ウ9、廿七オ3、廿七ウ7、三十オ

10、卅一ウ1、卅二ウ8、卅五ウ5、卅六オ3、卅六ウ5、卅九ウ

9、四十ウ6、四十一ウ2

「よき歎あしき歎」四十オ9

「よきとあしきと」廿六ウ8、卅五オ10、四十オ4

「よき風」廿九ウ5

「よくてもあしくても」十三オ5

「善悪」廿四ウ3、廿七ウ2、廿九オ10、卅六オ5、四十ウ1・2

「よしあし」廿九ウ7、四十オ7

「よしやあしや」四十ウ3

「外(ヨソ)の国」七ウ9・10、十オ1↓がいこく

「よみざま」廿八ウ8

「よみ人しらず」卅五ウ2

「世々」六ウ7、十三ウ4、廿五ウ3、三十ウ10、卅一オ4、卅二オ4、

卅二ウ10、卅三オ2、卅五オ10、卅七ウ5

「世々の学者」十七オ10

「世々の先達」四十オ1

「世々の物しり人」十一オ3

「代々」卅六オ4、卅七ウ6、卅八オ1

「よ」卅九オ10

「よろし」〔形〕二オ10、三オ6、十四オ1、十九ウ8、廿一オ2・4、

廿七オ9、廿七ウ5、卅二ウ7、卅五ウ3・7、卅八ウ1、卅九ウ

5、四十一オ5・7

「よわき歌」廿九ウ6

り

「六國史」一オ6、五オ2、十八オ2「六国史」九ウ2、十八オ2・6、
十九オ5

「理窟」十二オ5、十七ウ9、廿四ウ4、四十二オ6

「律令」一オ4、八オ8、八ウ6、九オ10、九ウ7

「理非」廿二ウ1

「流」卅七オ8・9、卅九オ9「流々」十一オ8

「理論」廿九ウ1

ろ

「論」十ウ1、廿五ウ7、廿九ウ7、三十オ6、卅三ウ3

「論じ」〔動〕九ウ6・10、廿九ウ7

わ

「和歌」↓やまとうた

「和学」七ウ2・6

「吾國」七ウ8「わが内の國」十オ3

「わきまへ」〔名・動〕十七オ3、十七ウ7、廿五オ10、廿七ウ2、廿

八オ10、廿九ウ9、三十オ6、卅二オ5・6、卅四ウ7・8、卅五

オ2・5・6、四十一ウ1・3、四十三オ4

「わろし」〔形〕三ウ1、七ウ3、十五オ2、二十ウ4、廿四ウ6、廿

九オ9、三十オ1、卅一ウ4・4・5・5、卅三ウ1・4、卅九オ

1、四十オ4、四十一オ10「悪し」卅一ウ10

「わろき歌」卅五ウ2、卅六オ3、卅八オ6

を

「教へ」廿三オ9「教へ」三ウ2、十二オ1、十五ウ9、卅七ウ3、卅

八ウ2・4・9、卅九ウ10「教」二十オ6、廿五ウ9、卅九ウ5

「をしへ」二十オ10、廿三オ4、卅四オ4、四十三オ2

二 書名一覧

- 「出雲国ノ風土記」五オ4
- 「伊勢(物語)」六ウ10
- 「うすの山蔭」十八オ1
- 「延喜式」五オ4・9、九オ8、廿五オ5
- 「神代正語」四オ6、廿四オ5
- 「玉葉(集)」卅七オ7、卅七ウ10
- 「舊事紀」十五ウ3・4・6
- 「葛花」四オ7
- 「源氏(物語)」六ウ10、四十一ウ8
- 「源氏物語の玉の小櫛」四十一ウ8
- 「江家次第」九オ2
- 「弘仁の内裏式」九オ1
- 「古今集」廿八ウ5、卅二オ10、卅五ウ1、卅六ウ2・3、卅七ウ9
- 「此集」卅五ウ4・9
- 「古事記」四オ3、四ウ3、十ウ8、十五ウ2・3・5・8・10、十七ウ1、廿三オ6、廿四オ6、廿六ウ6「此書」十六オ4「此記」十六オ5・6
- 「古事記ノ傳」五オ5、十四ウ1、十七ウ10、十九ウ4、四十三オ7
- 「此記の傳四十四卷」十六オ5「此書」十九ウ7
- 「後拾遺集」卅六オ4
- 「後撰集」卅六オ2
- 「古語拾遺」四ウ5
- 「此書(うひ山ふみ)」四十三オ5
- 「三代実録」五オ1、十八オ7
- 「私記」十三ウ8、十九オ3・4
- 「釋日本紀」五オ5、十三ウ7、十八ウ9「此釋」十九オ3「此書」十

- 八ウ9、十九オ1
- 「拾遺集」卅六オ2
- 「姓氏録」五オ4
- 「貞觀儀式」五オ4、九オ1・3
- 「職員令」八ウ6
- 「職原抄」八ウ7「かの書」八ウ8
- 「續日本紀」四ウ10「續紀」十八ウ3・4、廿五オ6
- 「續日本後紀」五オ1
- 「諸國の風土記」十九オ1
- 「新古今(集)」卅六オ7、卅六ウ2・3、卅七オ10、卅七ウ10「此集」卅六ウ4・5
- 「新續古今集」卅七ウ1・10
- 「神代紀」一オ3、十一オ9、十八オ1、廿七オ2
- 「神名帳」五オ10
- 「西宮記」五オ5、九オ9
- 「千載集」卅七オ10、卅七ウ10
- 「草庵集」卅八オ3
- 「大日本史」十八オ10
- 「題林愚抄」卅八オ7
- 「玉くしげ」四オ7
- 「玉才百首」四オ7
- 「直日のみたま」四オ7
- 「日本逸史」十八オ5「此書」十八オ6
- 「日本後紀」四ウ10、十八オ2「後紀」十八オ5
- 「日本紀」十五ウ3・4、廿三オ6「書紀」四オ3、四ウ4・9、五オ1、十ウ8、十六オ3、十七オ9・9、十八ウ2、廿四オ8「此紀」十七ウ3「此御典」十七ウ4
- 「風雅(集)」卅七オ7、卅七ウ10

「風土記」↓「出雲國ノ風土記」 「諸国の風土記」

「北山抄」五才5、九才9

「萬(万)葉集」四ウ7、六ウ2、十四才5、廿三才2、廿四ウ5、廿

八ウ10 「萬(万)葉」六ウ5、廿四才8、廿四ウ1、廿五才8、廿

五ウ1、廿七才5・6・10、廿七ウ3・6、廿八才5、三十才9、

卅一才6・7・10、卅二才2、卅二ウ3・7・9、卅五ウ5・8

「かの集」卅三才6 「此集」廿七才10 「此書」廿三才2

「萬葉の抄」十九才2

「文徳実録」五才1

「令」五才5

「類聚國(国)史」十八才4・6

「礼儀類典」九才4

「和名抄」五才4

三 人名・神名一覧

「天照大御神」四才1、廿六ウ10

「天ノ児屋根ノ命」廿七才1

「宇多(ノ)天皇」十八才8、卅五ウ8

「(柿本)人まろ」四十才9

「荷田ノ東麻呂ノ宿祢」二十才4 「羽倉ノ大人」二十才4・6

「鴨ノ祐之」十八才3

賀茂真淵「わが縣居ノ大人」十四才3 「吾師ノ大人」十五ウ9、廿五ウ

9 「わが師あがたゐの大人」二十才6 「わが師ノ大人」廿三才4

「此大人」十四才8、二十才9 「師」廿四ウ2、廿五才4、卅五ウ

3

「(紀)貫之」四十才9

「(京極)為兼卿流」卅七才7 「彼卿の流」卅七才8

「契沖はろし」二十才2、四十一才4 「此人」二十才3

「顯昭」四十一才1・7

「光孝天皇」卅五ウ8

「孝徳天皇」六才3

「後龜山ノ天皇」十八才10

「後小松ノ天皇」十八才10

「聖徳太子」十五ウ4

「神武天皇」十七ウ1、十八才10

「菅原ノ大臣(菅原道真)」十八才7

「仙覚」十九才2

「天智天皇」六才3

「頓阿はろし」卅八才3 「此人」卅八才5

「(藤原)定家卿」卅七ウ3、卅九ウ10

「(藤原)俊成卿」卅七ウ3

「法橋」四十一才1

「鎌倉ノ右大臣殿(源実朝)」廿五ウ8

「本居宣長」四十三ウ4 「宣長」三才9、四才6、十三ウ3・4、卅三

ウ4 「のり長」十四才9 「のりなが」四十三才2 「己が」三ウ2、

五才5 「己レ」十六才4 「おのれ」十四ウ6、卅二才1 「吾」三ウ

1、十才1、十三才6、卅四才2 「わが」卅三ウ7、卅四才4 「吾

家」十三才7

四 時代語一覽

- 「いにしへ」廿八オ9・10、卅三ウ10、四十ウ10、四十二ウ3、四十三オ1「古へ」八ウ9、九オ3・7、十六オ1、十七オ1、十八ウ8、十九オ8、二十オ8、廿一オ9、廿七ウ1、廿八オ7・8、廿八ウ1、廿九オ9、卅一オ3、卅一ウ9、卅三オ5、四十二オ3、四十二ウ8「古」四十二ウ1↓語彙索引こ・ふる
- 「古へと後と」卅一ウ10「古と後と」卅四オ2、卅四ウ6、卅五オ1・3「古と後世と」廿九オ10
- 「いにしへの歌」廿三オ5、四十オ7
- 「古への行ひ」十二オ9
- 「古への意」四ウ4、十一ウ1、十七ウ9「古の意」十二オ5、十三ウ9
- 「古へのさだまり」廿八オ8「古への定まり」廿八オ10
- 「古への式」十二ウ2
- 「古への集」卅九ウ8↓語彙索引ふるきしゅう
- 「古への制」八オ10
- 「古へのならひ」十七オ7
- 「古への人」卅八ウ4「古の人」廿四オ1↓語彙索引いにしへびと
- 「古の文」廿三オ5
- 「古への道」廿三オ4「古の道」七オ3、十三オ10、廿三オ7、廿四オ3、廿五ウ10、卅五オ4、四十二オ4・9「古へ」の道の意」十三オ6、十四ウ8
- 「古への御世」十二ウ2
- 「古への世」六ウ4、十六ウ5
- 「今」十五ウ8、十七オ3、十八オ3、十九オ1、卅三ウ3
- 「今の京」十六ウ4、廿八ウ7、卅五ウ10
- 「今の世俗」卅一オ9
- 「今の人」廿七ウ10、廿八オ9、卅一オ8、卅四ウ5
- 「今の本」廿四ウ6
- 「今の世」九ウ8、十三オ1、十八ウ9、十九オ8、廿一ウ10、廿三ウ7、廿七オ7、廿七ウ2、廿八オ8、廿九オ6、卅二オ3・5、卅二ウ7、卅三オ7、卅六ウ1、四十一オ7「今の世の人」卅一オ6、卅四ウ1・2
- 「宇多ノ天皇よりこなたの御世々々」十八オ8
- 「神代」四オ4、十ウ9、十六オ2、廿四オ3、廿六オ7、廿六ウ10、三十オ8
- 「上代」四オ4・5、八オ8、十六オ2、十八ウ7、十九ウ6、二十オ1、廿三ウ5、廿四オ3、廿六ウ8、卅一オ5、卅六オ10
- 「上代の歌」廿六ウ5、廿九ウ2、三十ウ1
- 「上代の人」廿三ウ5・8、廿六オ10
- 「光孝天皇宇多天皇の御代のころよりこなた」卅五ウ8
- 「上古」十七ウ4、廿四オ9
- 「上古の行ひ」十二ウ10
- 「上古の式」十二ウ4・6
- 「近きころ」十五オ2
- 「近き後世の意詞」卅四ウ4
- 「近きほど」廿八ウ9「ちかきほど」廿八ウ2
- 「近き世」十一ウ3、十五ウ6、十八オ3「ちかき世」二十オ2
- 「近き世の詞」廿八オ2
- 「近世」十一オ7、十二オ3・9、十八オ10、卅八オ10、卅九ウ2、四十オ4、四十一オ2・3
- 「近世の歌人」四十ウ2
- 「近く」四十一オ4「ちかく」九オ4
- 「中古」九オ6、九ウ3、廿三ウ5・6、卅七ウ2
- 「中昔」廿一オ10、卅九ウ3

「奈良ノ朝」二十オ8

「奈良の御代」十六オ7

「後」卅一ウ10、卅四オ2、卅四ウ6、卅五オ1・3

「後の人」十五ウ7、卅七オ2

「後の書」五ウ10

「後世」十六ウ5・9、十七オ5、廿三ウ6、廿四オ1、廿五ウ7、廿

七オ7、廿八ウ8、廿九オ9・10、廿九ウ7、卅一オ10、卅一ウ6・

9・10、卅四オ1、卅四ウ5・7・8「後ノ世」廿六ウ4

「後世の歌」廿九オ7、廿九ウ3・10、三十オ2、三十ウ8、卅一

オ5

「後世の説」十九ウ10

「後世の人」廿三ウ6、廿六ウ1

「後世の書」一オ7、九オ1・7

「万葉のころ」廿八オ5

「万葉の後」卅二ウ7

五 あてよみ字訓一覧

アメ「天」廿一ウ2

イトマ「暇」三オ1・2

ウセ「亡」十八オ2、十九オ3

オン（き）「晩き」三オ2

オヤ「祖」二十オ3

カケ「係」廿九ウ1

カタ（く）「堅固く」十五オ7

カタ（まり）「堅固まり」四オ10、廿二オ5

カラゴ、ロ「漢意」四オ10↓語彙索引

カラブミ「漢籍」六オ2↓語彙索引

クハ（しく）「精しく」二十オ9

コトバ「言」廿三オ9

シカ／＼「云々」二オ10、三オ6、廿一ウ8

ソナ（はれ）「具備はれ」四オ9

ツチ「地」廿一ウ2

ツバヤカ「簡約」五ウ10

テマ「功」八ウ3、四十一ウ6

トク「釋（く）」廿一ウ2・3

「説」十一オ4、十一ウ7、十三オ3

ノリ「則」廿八オ6↓語彙索引

ノリト「祝詞」五オ9↓語彙索引

ノリトゴト「祝詞」廿七オ1↓語彙索引

ヒトムキ「偏」卅三ウ3

フタミフミ「二典」四オ4↓語彙索引

マハリドオ（き）「迂遠き」廿三オ9

マメ「忠実」十四ウ4

マモリ「衛」四ウ1

ミフミ「御典」十五オ10↓語彙索引

ミヤビ「風雅」六ウ5、七オ2、四十一ウ10↓語彙索引

ムネ「主」三ウ7・10、十オ8、四十二オ5

「致」十一ウ7

ヨソ「外」七ウ7・9・10、八オ4、十オ1

ワ「圈」七オ5

ワザ「事」廿三オ10、廿三ウ1・4、廿四オ1

ヲカ（しけれ）「可笑しけれ」十一ウ6